

書かれた日記について書く小説——青山七恵『やさしいため息』

松本 和也 MATSUMOTO, Katsuya

「どんなことが書いてあるのか知りたくてたまらないよ。これは一種の日記なのかい？」
クラウスは言う。

「いや、嘘が書いてあるんです」
「嘘？」

「そうです。作り話です。事実ではないけれど、事実であり得るような話です」

——アゴタ・クリストフ／堀茂樹訳『第三の嘘』

▽『書くこと』へ

年譜・受賞歴の確認からはじめてみるならば、第四二回文藝賞受賞作となった「窓の灯」(『文芸』二〇〇五・冬)でデビューした青山七恵は、第二作「ひとり日和」(『文芸』二〇〇六・秋)で第二三六回芥川賞を受賞し、その受賞第一作として「やさしいため息」(『文芸』二〇〇八・春)を発表する。その後も、最年少で川端康成賞を受賞した「かけら」(『新潮』二〇〇八・一一)や、織田作之助賞候補となった『すみれ』(文藝春秋、二〇一二)など、青山七恵はゆるやかなペースで着実に佳作を発表

しつつけてきた。もちろん、その間、小説家として変化・進化を遂げてきたように見えるのだけれど、それらを貫く作風については、江南亜美子が「本 堆積する時間の描かれかた 青山七恵『あかりの湖畔』中央公論新社」(『新潮』二〇一二・三)で次のように論評している。

「たったいまは、表面上になにも起こっていない風いだ時間を過している人物にも、かつていくつもの「なにか」は起り、そのひと自身を形づくっていった。皮膚をすこし削るだけで赤黒い血がふきだすように、すべらかにみえる表面の下には生々しい過去の経験や

記憶が潜んでいる。時間には堆積した厚みがある、若かろうと老人であろうと、ひとは厚みとともに生きている——青山七恵という小説家のもつ美質をひと言でいえば、おおよそ小説の登場人物らしからぬ派手さのない人物たちの、その厚みを描き出せるという点だろう。

確かに、青山七恵の小説に派手な道具立て、突飛な出来事、非凡なキヤラクターなどがもりこまれることはなく、むしろそのほとんどが等身大の日常(性)とでも称すべき要素から成立している。にもかかわらず、その小説表現は凡庸さからはおよそ縁遠く、深みや生々しさすら感じさせる。江南によれば、それは端的に描写力によるのだというし、「きんようぶんか読書 青山七恵『やさしいため息』河出書房新社」(『週刊金曜日』二〇〇八・六・一三)の陣野俊史もまた、「青山さんの小説は、描写の正確さによって出来ている」と、同様の指摘をしている。

ここで、そうした見方を疑う材料があるわけでもなく、むしろ青山七恵の小説群はそうした評価を正当なものとして受けるべきだと思われるが、それでも、青山七恵の小説が一作ごとに固有の相貌をもち、変化・進化があるというのならば、その描写力にばかり感嘆してもいられない。

たとえば、近年の『わたしの彼氏』(講談社、二〇一一)や『すみれ』(文芸春秋、二〇一二)などにおいて顕著なのは、小説に登場する人物が、小説や自伝を書くという行為である。つまり、「書くこと」というモチーフが青山七恵の小説群においてせりだしてきたように映じるのだけれど、その端緒を求めれば、明確なあたりで「書くこと」をモチーフにした小説として『やさしいため息』(河出書房新社、二〇〇八)にいき

あたる。しかもそこで展開される「書くこと」とは、単に小説のモチーフというにとどまらず、OLの日常(におけるささやかな変化)といった物語内容よりも重要なテーマを成しているようにみえ、さらにいえば青山七恵による「小説上で展開された小説論」のようにすら読める。そこで本稿では、『やさしいため息』の精読を通じて、青山七恵にとつての「書くこと」について、考えをめぐらせてみたい。

▽まなざされる生活・書かれる日記

ここでの興味は、(一通りの内容理解という意味で)読めば読める、『やさしいため息』の物語内容・ストーリーにはないので、それについてはインタビュー記事「青山七恵『やさしいため息』河出書房新社」(『ダ・ヴィンチ』二〇〇八・七)における紹介文を参照しておこう。

ストーリーはひとり暮らしをするOLまどかのもとに、行方不明だった弟の風太が現れ、部屋に転がり込んでくるところから始まる。今日一日どんなことがあったのかをまどかに訊ねては、それを日記に綴る風太。はじめは嫌がっていたまどかだったが、自分の毎日が弟の視点で書かれるその日記が次第に気になって行く――。

こうしたストーリーをもった『やさしいため息』のアイディアは、芥川賞受賞後の実体験によるものだという。「新刊・著者インタビュー 9 回 青山七恵『やさしいため息』」(『編集会議』二〇〇八・八)から、青山七恵本人の発言を確認しておこう。

「他人の日記をつけるというアイデアは、芥川賞受賞のインタビュ―記事で、自分のことを読んだ時の不思議な違和感がもたになって、います。自分が考える自分ではなく、他人が表現する自分に対して、どう感じるのかにすごく興味がわきました。今回、その思いは主人公のまどかが自分を変えてみようと思うきっかけに反映されています。まどかは半分嘘が混じった自分の記録を読むことで、あったかもしれない自分のもう一つの生活に思いを巡らせるんです」。

今一度確認しておくならば、『やさしいため息』とは、女性単身者であるまどか（姉）の日常をていねいな筆致で描出した小説である。そこにもりこまれているのは、まずはOLとしての平凡な日々なのだけれど、風太（弟）がその生活に介入してくることで、徐々に変わっていく。そこでの変化とは、確かに風太との同居にまつわることごと（そこには、風太の友人・緑との恋愛めいたいきさつも含まれる）に起因するのだけれど、決定的なのは、風太よりもむしろ、風太がまどかの生活を「書くこと」にこそある。逆にいえば、まどかは風太に書かれる立場に置かれる。こうした設定について、青山七恵作品史を視野に収めた上で転換を読みとる榎本正樹は、『さみしさ』と表裏一体の感情 青山七恵『やさしいため息』（『文学界』二〇〇八・七）で次のように論じている。

この作品でまず注目されるべきは、語り手の変更だろう。これまでは、他人の家に寄宿する奇妙な性癖をもった主人公の側の視点で語られてきたが、本作では住む場所を提供し、なおかつ性癖の影響を被る側（ミカド姉さんや吟子さんの側）に視点が移される。この

ことは、単なる語り手の変更に止まらない。視る／視られる、記述する／記述される関係、つまり主体と客体が逆転し、弟によって観察される客体である「わたし」が彼について語っていく新しい関係のモードが提出されることで、青山作品を特徴づける「まなざしの交錯をめぐるドラマ」は、より複雑化されることになるのである。

こうした様相は、まどかが風太に日記を書かれる前から、さりげなく起動している。電車での突然の再会后、喫茶店で一日終業を待ちつづけた風太は、仕事を終えたまどかに「まどか、部下がいるの？ すごいね、偉くなったね」と声をかける。事実は逆だなのだけれど。風太には、まどかが部下を引きつけて歩いていたように見えた、というのだ。

「え、何、昼？ 見たの？ こつちからは全然見えなかった」

「ここから見えた」

風太は背中を指差した。確かに、額がくつつくくらいガラスに顔を近づけると、隣の店とのあいだの細い隙間から地下道がわずかに見えた。嬉しいような気がした。部下を引き連れて歩く先輩に見えたのだ、このわたしが。

ここには、見る・見られる関係の非対性が鮮やかに描出されているが、まどかが見られることの快楽を自覚している点も見逃せない。先輩に見えたそのことよりも、見られるというかたちで自己認識とは別の自身が現象し、しかも、それが現実とは異なつてもよいのだと肯ったこと——つまりはもう一人のフィクションナルな自分が生まれたことにある。

通勤電車で突如再会した風太を自宅に泊めた翌日、まどかは「昨日風太が寝ていた毛布の脇に、大学ノートが落ちていた」のを見つけた。しかも、「表紙には「まどか」と縦に太いマジックペンで書かれている」。

何も言わずに開いてみると、一ページ目に「希望はない」という言葉でしめくくられた教行の文が記されていた。読んでみると、昨日寝る前にわたしが風太に話したことがそのまま書かれていた。

そう思ってみれば、確かに前夜、まどかは風太に質問されていた。

「今日はどんな一日だった？」

「別に。よくもなく悪くもなく。会社に行つて、電車の中で風太に会つて、連れて帰つてきた。そういう一日」

書かれるなど予期することなく交わした会話が、風太のノートに書かれると次のような文字として現象し、まどかは少なからず衝撃を受ける。

『昼に同僚とパスタを食べる。食事のあいだは、仕事の話と週末の話とだんなさんの話をする。だんなさんというのは怒ったりお菓子を作っている。仕事をしているときは、主に仕事のことを考えている。それ以外は思い浮かばない。希望はない。』

たった教行ほどの走り書きの文字が、わたしの一日だった。だんなさんのところまでは嘘だから、そのあとの部分だけがわたしの一

日だ。その教行をコピー、貼り付け、コピー、貼り付け、をして、続いていく毎日だ。

こうした小説の冒頭部で提示されるエピソードについては、伊井直行・清水良典・小谷真理「第三八四回 創作合評」『群像』二〇〇八・三）で次のように論評されている。

清水 他人の人生を記録するというのは、ある意味、残酷なことですね。お前の人生はこんなにも何もないんだということを形であらわすわけですから。

伊井 会社員の人生はいかにつまらないかということ、弟は姉に向かつて見せつけているというふうにも読めます。

もちろん、さしあたりはまどかもそのように感じているし、そのように読めば『やさしいため息』はとても理解しやすい小説だということになる。ただし、見られる（書かれる）ことに由来するフイクシヨナルな自分に快樂を見出し得るまどかであつてみれば、ことはそう単純ではない。自身の生活を鏡よろしく映しだすノートにネガティブな作用しか見出せないなら、作中で縁がそうしたように、風太を追いだして書かれることから逃れればよい。しかし、まどかはそうしない。そればかりか、書かれることにくわえて、さらなる快樂をノートに見出していくだろう。

「まどか、高校生のとき日記つけてただろ。俺が今、まどかの代わりに日記をつけてやつてるんだ。書いてもらえるなんて、ラッキー

だよなあ」

「ぜんぜん」

そう言いながらも、わたしはもう一度ノートを読んでいた。

続きがあってもいいかもしれない、と思った。高校生のときに書いていた日記は、枚数が増えていくのが楽しくて、書き続けることで一つの話ができあがっていくようで、書くときよりも読み返すときのほうがどきどきしたものだ。それと同じ懐かしいときめき、新品のノートの紙の匂いに混じって、今、鼻の奥のほうをほんのわずかに刺激している。

つまりまどかとは、風太のノートをめぐって、それを忌避して排すどころか、積極的に書かれることを望み、さらには積極的に（書かれたフィクションな自分を）読む人物・小説上の装置なのだ。逆にいえば、風太とは、そうしたまどかの欲望を満たすために、あらわれ、話を聞き、ノートに書き、読ませるための人物・小説上の装置だということになる。従って、だからこそ、『やさしいため息』という小説内では、登場人物たちの内面や行動よりも、さまざまな様態をとった言葉（の交換）こそが重要になる。《「わたし」に影響を与えるのは、現実のできごとではなく、ノートに記録された言葉であることに注目したい》と榎本正樹が「「さみしさ」と表裏一体の感情 青山七恵『やさしいため息』（前掲）で指摘するように、まどかは（自分について）書かれたノートを読むことによつて、これまでになかった発想・行動へと踏みだしていく。

懇親会などなかったけれども、なんとなく言ってしまった。でも、

たまにはいい。風太が来てからは、ずっとと彼と一緒の夕食だった。「週末は終電近くまで」と言ったのに、先週はうっかりふつうに帰ってきてしまったから、今日ぐらいいは「同僚と飲みに行く」というのをやらないと、なんとなく気まずい。

それは必要な気まずさだけれども、嘘をついているのを疑われて、説明したりしなかったりするの、想像するだけでも気が重い。ますます帰ってきてわからりつこないのだ。でも、もし可能ならば、本当に誰かとちよつと食べて帰ってくるのもいいかもしれない。

思わぬところで開いた穴から、一瞬風が吹いた。ふと思いついたこの考えが、電車に乗っているあいだ頭から離れなくなった。

この時まどかは自意識過剰になっており、風太が確認するとも思えない、自身のついた嘘について思いをめぐらし、むしろ嘘に発想・行動をあわせていく。この動因モチベーションとなっているのは、単なる風太の存在ではなく、（夜、質問に答えて自分が語ることで）風太が書くノート、さらにはそこに書かれたフィクションな自分を読むことへの高い興味である。

しかも右のような一連のプロセスには、嘘が幾重にも折りたたまれていく。こうした局面については、「本 偽日記文学の系譜 青山七恵『やさしいため息』河出書房新社」『新潮』二〇〇八・八）の田中弥生が次のように整理している。

このノートは内容的には「まどかの日記」だが、風太がつけているから、そもそも偽日記だ。さらにまどかが会社で同僚と親しくつきあっているように日常を作り替えて風太に話しているため内容も半

分嘘である。「江藤まどか」は二重に偽日記なのだ。そしてこの偽日記が、物語の進行とともに現実化していく。

ふとしたことから再会した姉弟は、その夜から言葉（の交換）によって深く関わっていたのだ。その要素・サイクルを今一度まとめよう。

- ①まどかが生活をする
- ②風太が質問をする
- ③まどかが語る
- ④風太がノートを書く
- ⑤まどかがノートを読む
- ⑥まどかが生活をする

もちろん、①と⑥の「生活」には、単に時間の経過に伴うまどかの経験ばかりでなく、②と⑤の「書くこと」をめぐる経験が大きく関わっていくだろう。さらにいえば、③を中心に、それぞれの段階において嘘、あるいはそれに類したものが混ざっていく。というのも、聞いた話をありのままに書く（④）／書かれた文字を過不足なく読む（⑤）ことなど原理的に不可能だからで、まどかが自覚的に語った嘘とあわせて、「書くこと・読むこと」にまつわるズレがノートをフィクションにしていく。

まどかは、風太と同居してから、「風太のあのノートに記録されているような変わり映えのしない毎日が、永遠に続くのだろうか」という思いに改めて囚われていくのだけれど、ノートはそのことに気づかせる契機であると同時に、そうした現状・日常を突破する踏切板でもある。

風太が、まどかについて書いたノートを読んで「なんか、ぜんぜん起伏がないなあと思って」といえば、まどかは次のように応じてみせる。

「起伏？ 必要ない」

「ほのぼのとした日常って、続きすぎると苦痛だよなあ」

「読む人にとってはでしょ。そんなの読むの風太だけだよ。本人はちっとも苦痛じゃない。そんなこと考えてるほど暇じゃない。あたしは毎日ちゃんとご飯が食べられればいい」

そうはいうものの、凶星をつかれた格好でもあり、「味付けしている毎日の記録なのに、起伏がないと言われたのは意外だった」とも感じる。そこから、具体的には緑との関係を進めるといふかたちで、まどかの日常は、単純な日常の反復とは少しく異なつた様相をみせはじめていく。

このあいだから、どうでもいいような嘘のあいまに、緑君と会つて、食事をし、次の食事の約束をとりつける、という一連の出来事が、ノートの中でちゃんと記録されている。なんの盛り上がりもない簡素な記録だけれども、読んでみると少しずつ、でも確実に物事が進んでいるんじゃないかという気になつてくる。

ここで重要なのは、緑という異性との関係それ自体よりも、ノート・「書くこと」に関わつて人生が動きはじめていくことで、まどか自身もノートに「執心している」ことに自覚的である。だから、まどかは現実の言動を反芻するよりも、それが書かれたノートを読むことを選ぶ。

『緑を家に呼んで食事をした。来る前まではいやだった。弟がエビチリを作った。おいしかった。三人で談笑した。駅まで送るはずが、誘われて緑の家に行った。一晚過ごして帰った。朝帰ってきて、一日中寝ていた。』

今朝読んできた週末の日記は、一語一語が事実だった。今まで風太に話してきたどの一日よりも作り話のようなのに、本当の話だった。家を出る前に、わたしは何度も読み返した。

こうして、その生活に“書くこと”を中心とした言葉（の交換）が入りこんでくることによって、まどかは「数週間前までと生活の場はまったく変わってないはずなのに、見えている景色が違う」と感じ、その効果は人間関係の受けとめ方や同僚の笑顔の見え方にまで及んでいく。それが、まどか自身の読むという行為によるものであることは、風太が書いていた他の人物についてのノートに目を通した際にはつきりする。知らない人物につづき、緑のノートを読んだまどかは、次のように感じる。

彼の記録には、他の人たちのノートの中にある一つの筋のようなものが見つかからない。これはと思う出来事も、次の日には跡形もなく消えてしまっている。それは彼が、今夜わたしに言った通り、何にも、誰にも執着しないからなんだろうか。一つの出来事が地続きになって彼の生活を変えてしまうことなどないのだろうか。

やはり、まどかは『読むこと』を選ぶ——ノートを読んで、「筋」の有

無を見出し、それが「生活」に及ぼす影響にまで思いをめぐらせていく。そうした人物・小説上の装置であれば、一度は関係をもった緑とつづかないのは、けだし当然である。風太のノート、「書くこと」に触発されて、まどかは書かれ、読むことを欲望したのに反して、風太を追いだした緑は、ノートを読むことも、生活がかわることもなかったのだから。

▽日記・小説をめぐる“書くこと”

さいごに、風太が去っていく小説後半に注目しながら、少しく視野・射程を広げてみよう。鴻巣友季子は「弟が聞き書きする「姉の日記」の虚実 青山七恵『やさしいため息』河出書房新社」「『週刊朝日』二〇〇八・八・一」で、作中の日記に書かれた嘘をそれと知りながら肯い、納得していくまどかのあり方を『非常にスリリング』だと評し、『小説と、小説を読んでその嘘を「リアル」だと感じる読者との関係図によく似ているではないか?』と、小説の外延をまたぎこえるような見立てを示している。また、豊崎由美は「すばる文学カフェ 作家の成長を見せる新作 青山七恵『やさしいため息』河出書房新社」「『すばる』二〇〇八・八）で『人の心を動かす言葉（言葉）の力、つまり小説が持つ根源的な力についても描いているのではないかと』と、小説内における「書くこと」ばかりでなく、小説の原理的な側面についても論及している。双方とも、小説の内部に読みとつた様態を、小説の外側へとトレスした上で、二重写しにすることで『やさしいため息』を評価している。ここに、青山七恵による「小説上で展開された小説論」を探るヒントがある。この論点を掘り下げていくために、田中弥生「本 偽日記文学の系譜 青山七恵『やさしいため息』河出書房新社」（前掲）を参照してみよう。

小説内で生成されていく偽日記の文体がその小説自体と一致する
 なら、書かれた偽日記と、それを内に含む作品の境界は存在しない。
 つまりこの「やさしいため息」全体が、偽日記「江藤まどか」の完
 成型である可能性があるのだ。

これにつづき田中は、「風太」が有名なレツサーパンダの名で、「緑」
 が有名なトキの名であることを思えば、「風太」の実在は疑わしい」とし
 て、「この作品が「弟が書いたという設定で偽日記を書いている女性、ま
 どかの日常」を青山七恵が記録した、偽日記小説であるということ在意
 味する」と自説を展開していく。後段では、現実世界の小説家・青山七
 恵までが乱暴に登場させられるなど、牽強附会のきらりがあるけれど、
 引用部の《「やさしいため息」全体》に関する指摘には耳を傾けたい。

駅で、部屋で、街の中で、わたしはある声を探している。風太の
 ノートに書かれた文字のように、その声がわたしの生活を語ってく
 れることを待っている。

右の結末部にふれて、清水良典は「第三八四回 創作合評」（前掲）で
 《人に語ってもらうことでしか輪郭が持てない、現代人ののっぺらぼう
 さが、このノートによって象徴されている》と指摘しているけれど、重
 要なのは、現代の象徴を読むことよりもむしろ、まどかが待ち望んだ「声」
 のゆくえと、この『やさしいため息』とを考えあわせてみることである。
 『やさしいため息』の登場人物であるまどかが、まずは書かれること

に、ついで書かれた自分を「読むこと」に快樂を見出す人物・小説上の
 装置であることは、すでに論じてきた。そんなまどかが、風太の去った
 後、自身について誰／何かが「語ってくれることを待っている」。そのま
 どかは、ノートを読むことで次のように書き手の風太を想像してもいた。

ノートを閉じている今、不思議と目に浮かぶのは、見知らぬ人々
 の生活を記した筆圧の弱い字より、その字を次の字へとつなぎあわ
 せている余白の部分だった。風太という人の形が、文字たちのあい
 だに、窮屈そうにはさまっている気がした。

ここでは、ノートに書かれた文字を読み、「余白」へと想像をたくまし
 くしているまどかの姿を確認した上で、次の本文もみてみよう。多くの
 人についてノートを書いてきたことについて、まどかが風太に「でもこ
 んなこと書いて、何が楽しいの？」と問うた後のやりとりである。

「みんな同じこと聞くよ。でも聞くだけ。みんな、最後は俺のこと
 より、そこに書いてある自分たちの人生のほうを深く考え始めちゃ
 うんだよ。なんなんだろうなあ、それって」

「だってみんな、そこまで面倒みられないよ。あんたが悩んでいよ
 うが、さみしかつたり怒ったりしていいよが、自分の大事な時間を
 さいてまじめに向き合うくらいは価値があるとは思わないでしょ。
 あたしだって、あんたのさみしさなんか、見て見ぬふりしたいと思
 うよ」

風太の書くノートが、鏡として書かれた人物の日常を照らしだすというのはいかにもわかりやすいが、まどかのセリフを反転させてみると、自分自身のことについてなら、「まじめに向き合うくらいに価値がある」という判断が浮かびあがってくる。もちろん、それが、風太という人物・小説上の装置によって、小説中で「書くこと・読むこと」が起動し、まどかが自身の欲望を触発・喚起されたがゆえの帰結であることは、この『やさしいため息』固有の相貌として決定的なモメントを成している。

してみれば、風太に書かれたノートだけでは表現しきれない「まじめに向き合うくらいに価値がある」・「自分たちの人生」——まどかのついた嘘や、ありえた言動の可能性、表面化されなかった内面など——について、書きたいと思いつけるのがまどかという人物・小説上の装置ではないだろうか。つまり、風太との再会／別れをへて、まどかは「見られ、書かれ／読む」というサイクルの後に、そこまでの言葉（の交換）の態を貫く力学に即して、「書くこと」を選んでいくと考えられるのだ。

小説本文に即してこうした見方をとれば、結末部のゆくえをこの『やさしいため息』に求めることができる——結末部は、前から読み進めてきた『やさしいため息』の終わりであると同時に、『やさしいため息』の語り手が語りおこすことになった始まりの地／時点（の痕跡）なのだ——ここから、「物語が、始まる」（川上弘美）のであり、時間軸から整理するならば、物語内容の一連の経過の後に、語り手（それは、まどかかも知れない）がこの『やさしいため息』へと結実する文字を「書くこと」という行為・時間が想定される（拙著『現代女性作家論』（水声社、二〇一一）参照）。逆にいえば、この『やさしいため息』とは、登場人物であるまどかが、小説の語り手としての意識に覚醒し、「読むこと」か

ら「書くこと」へと折り返していく小説家の生成・誕生を、その動因／プロセスを明示しながら綴った小説なのであり、そこではさまざまなフレイズにおける「書くこと」が主題として展開されていたのだ。

してみれば、『やさしいため息』とは、単なる「作者・小説・読者」の関係といったあらひ綱目ではなく、「書くこと・読むこと」といった主題を担った人物・装置を戦略的に配置することで、言葉（の交換）の態・言葉の力を、小説それ自体において問い直した小説に他ならない。おだやかにみえもする『やさしいため息』が、青山七恵による「小説上で展開された小説論」にみえるとは、そのような意味においてである。

※本文引用は、青山七恵『やさしいため息』（河出文庫、二〇一一）による。